

## 32 其御所之御慈悲ヲ以為御取埋被下候…

そしてこの文句は次の様に結ばれます。…「此方江一言之及御付届不申候」さて、これは何を言っているものでしょうか。実は、これは西国巡りの巡礼等が所持した「往来手形」の末尾へ記される定型句なのです。つまり、道中不幸にして旅人が死亡したときは「そちら様の御慈悲により埋めてやってください。」。そして、「こちらへのお言付けには及びません。」ということなのです。行き倒れの無縁仏を前提とした捨往来手形です。お寺が発行する意味が分かるというものです。

現今の「行旅死亡人」の埋葬等の扱いは、その地の市区町村役場が担当しますが、往時はその集落の手に委ねられていたようです。そして、そのことは旅人を送り出した方へ「伝わることはない。」ということですから、「水杯」を交わして旅立つという覚悟の程も知れようというものです。

「大山道」は、伯耆大山を中心に四方に発達した交通路です。中腹にある大山寺へ詣でる善男善女、牛馬市目当ての博労の通う道というイメージが先行しますが、山陰や美作地方の諸物産を山陽、上方へ運ぶ経済的な役割を担う重要な道でもありました。

皆さんは、この大山道の一つが大井郷（粟井一里塚の大松は、老木で倒木のおそれがあったので昭和53年に切り倒されました。）を南北に貫いていることをご存知ですか。

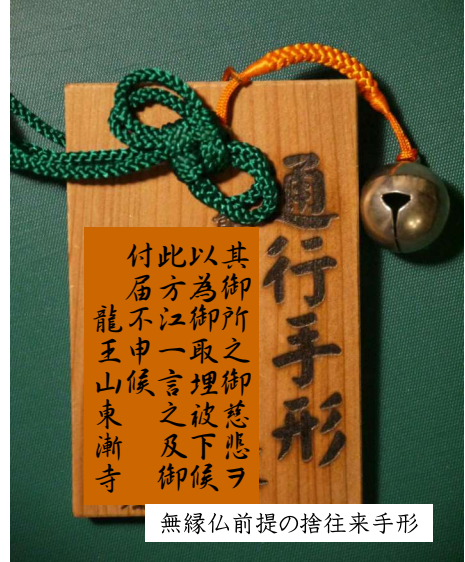
今回はこの道筋において、「往来手形」に記すとおり  
の悲しい出来事があったことを御紹介する次第です。

時は延享五年（1748）十一月、備前金山寺、備中国分寺へ納経を済ませた六部（六十六部行者・回国聖）は、次なる目的地、伯耆の大山寺をめざしました。

しかし、一日の食と銭を乞いながらの長旅は相当にきつかったものか、とうとうその月の十三日早朝、猿見の難所を前に、飢えと寒さに耐えきれず、黒谷池の東側を巡る大山道の路傍で息絶えたのでした。

そこで、掛畑村の庄屋片岡氏と講連中が世話人となり猿見の難所を往来する旅人の無事を祈念するものとして、その地に供養塔を建て六部を手厚く葬ったのです。

高さ2 m ばかりの自然石の供養塔は、黒谷池改修のため100 m ほど東の掛畑口橋の東



詰へ「掛畑下第五十四番札所」と共に移転されました。正面に「南無阿弥陀仏為廻國人供養塔」、左側裏面に「延享五年十一月十三日片岡氏」と刻んであります。

今一人は、杭田地内に葬られた母子旅の母親です。戒名の「還」の字からして、西国三十三観音霊場の巡礼者かもしれません。猿見を南に越え、後三日もすれば芸州豊田郡田万里村（現在の広島県竹原市）へ生還できるはずでした。しかし、理不尽にもこの杭田の大山道脇で落命したのです。今度は、東山内村の連中が世話役となり埋葬されました。墓碑の正面右に「文化十三年（1816）十月七日」、中央凹部に「妙法妙還信女位」、裏側に「藝州豊田郡田万里村〇母」と刻んであります。



西国巡礼者供養墓

さて陰陽を結ぶ動脈は陸路ばかりではありません。備中国を流下する高梁川も物と人を運ぶ経済の大動脈でした。そしてここでも大変悲しい出来事があったのです。

時は寛政七年（1795）六月八日、折柄の高梁川の増水に乗って新見三日市場の船着場を出発した高瀬舟は、草間村広石地内の急流で転覆。雲州神門郡（島根県出雲市）市場村の利太郎ら同村の者4名、同稲佐村の喜三郎ら2名、讃州塩飽島の忠次郎等合わせて15名が溺死するという大事件がありました。



高瀬舟転覆溺死者供養の碑

雲州の利太郎らは伊勢、金比羅あるいは小豆島巡りに往く途次、塩飽島の忠次郎は、大山寺から出雲大社を巡り帰路にあったものでしょうか。そして、雲州や塩飽島へこのことは伝えられることはなかったのでしょうか。供養塔は事故発生

から七回忌に当たる享和元年（1801）六月、現場を見おろす川岸に草間村庄屋、新見藩船差役等によって建立されました。自然石の2mを超える塔の中央には大きく「溺死為菩提」と刻み、右に寛政七年、左に卯六月八日、下部に十五名の生国と名前が刻んであります。（…大井郷とは無

関係の話しですが…）



満願成就の日本回國供養塔

左は、上高田の鼓神社鳥居脇の細道を岩見方向へ50m程登った所にある日本回國供養塔です。左のは、延享三年（1746）九月に日下軒湛智、右は宝暦六年（1756）八月に田中姓の行者浄心により建立されました。彼等は六部となって法華経六十六部を全国六十六ヶ所の霊場へ納経し満願成就、記念の供養塔を建てることができた強運な者達です。